



TITLE:

第76回岐阜外科集談会

AUTHOR(S):

CITATION:

第76回岐阜外科集談会. 日本外科宝函 1975, 44(6): 500-502

ISSUE DATE:

1975-11-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/208096>

RIGHT:

13. 最近5年間の結腸癌についての検討

岐阜市民病院外科

○渋谷智顕, 堀部 康, 高井 清一
伊藤隆夫, 田中千凱, 松村幸次郎
島田 脩

昭和44年から昭和48年までの5年間における当該施設での結腸癌について調査したので報告する。過去5年における直腸癌56例に対し結腸癌46例で、発生年齢は直腸癌が60代に最も高発したのに対し結腸癌は50代が最高で、最低年齢33才、最高年齢86才であった。性別では、結腸癌、直腸癌共に男子にやや多く、結腸癌の発生部位はS字状結腸が最も多く過半数を占め以下、上行結腸、盲腸、横行結腸の順序で多発性が1例あった。初診時診断(術前診断)は結腸癌としたもの40例で以下、イレウス4例、虫垂炎、胆のう炎各々1例で診断法は注腸透視、結腸鏡によった。結腸癌の初発症状、初発症状から手術までの期間、手術方法、吻合法、術後合併症、腸瘍の分類等について報告した。

14. 胆石イレウスの1例

岐阜市民病院外科

松村幸次郎, 堀部 康, 高井清一

渋谷 智顕, 伊藤隆雄, 田中千凱
島田 脩

異物嵌頓による腸閉塞のうち、胆石イレウスは、比較的稀な疾患であり、本邦イレウス症例12,614例を調べた岡田らの集計では、6例(0.05%)にすぎない。本症の成因は、胆嚢炎に起因する胆嚢腸管癒によるものが大部分で、このうち胆嚢十二指腸癒によるものが最も多いが、我々は、最近、自然胆道より排泄された胆石により、イレウスを来たしたと思われる症例を経験したので、若干の文献的考察を加えて報告する。患者は、腹部膨満を主訴として来院した、68才の男性で、術前の注腸透視にて、回腸末端部に結石像を認め、開腹手術にて同部に嵌頓していた、くるみ大の胆石を剔出したが、胆嚢内に、結石を触知したものの、胆嚢腸管癒は認められなかった。剔出結石は、大きさ約 $3 \times 3 \times 2.5$ cm、重さ約14gにて、コレステリンを主成分とするものであった。なお本症例では、胆石や胆嚢炎を思わしめる既往が全くなく、2の点も非常に興味深い次第である。

文 献

- 1) 岡田耕平: 日医大誌 24: 370 1957
- 2) 篠原幹男: 外科治療 119-1285 1971

第76回岐阜外科集談会

日時: 昭和49年10月29日午後5時30分

場所: 岐阜大学病院新外来棟4階講堂

1. 口峽咽頭部に発生した大きな多形性腺腫の2症例

岐阜大口腔外科

三浦隆司, 高橋利典, 小島孝司
清水 徹, 阿部輝夫, 永瀬英樹
立松憲親, 岡 伸光

唾液腺腫瘍は大小唾液腺部に比較的多く発生する腫瘍であり、多様な組織像を呈する腺腫瘍である。当腫瘍の分類、発生機序および悪性度などについて病理学者の間では現在なお論議されている。

今回私達は口峽咽頭部に発生した小口腔腺由来の大きな多形性腺腫の症例を相次いで2症例経験した。2症例とも60才女性であり、摘出腫瘍の大きさは $7 \times 5 \times 5$ cm と 5×5 cm と $5 \times 4 \times 4$ cm であった。その内の1症例は腫瘍内に粘液様内容物 25ml を貯留し

た文献上も非常に稀なものに遭遇したので病理組織学的所見および考察を加え報告した。再発については現在なお経過観察中である。

2. Cronkheit-Canada 症候群の1例

松波病院科外科

○松波英一, 松浦昭吉
吉田敏生, 和田英一

遺伝性が無く、脱毛、皮膚色素沈着、爪の変形脱落、位蛋白血症と広範な消化管ポリポーズを来す疾患を1955年 Cronkheit と Canada は報告したが我々は此の症候群に極めて類似した1例を経験し開腹し確診を得る機会を得たので報告する。症例: 43才男子、家族歴、既往症に特記すべきものなし。本年5月頃より下痢、下血、爪の変形、顔面、手、足背部の皮膚色

素沈着を来たす。更に不定の腹痛、悪心、吐血を来たすようになり来院す。消化管レ線検査で胃結腸に大小無数のポリポージスを認めた。食道十二指腸、小腸には認めなかった。血清蛋白 3.8g/dl と低く、RISA 吸収試験は 3.6%¹³¹ PVP 漏出試験は 0.3% であった。確診を得るため開腹し肉眼的に悪性を疑わしめる所見は得なかった。病理標本では著明な腺の嚢胞状拡張と間質の増大、浮腫、細胞浸潤を認めた。

3. 軟部好酸球性肉芽腫の 1 例

岐阜市民病院外科

高井清一、東 修次、堀部 廉
三輪 勝、渋谷知顕、伊藤隆夫
田中千凱、島田 脩

症例：16才、男性、13才の時左下顎部皮下に無痛性びまん性腫瘤を形成し、摘出術を施行、組織学的に軟部好酸球性肉芽腫と確認、4 年后に左下顎部さらに下顎正中部及右下顎部に再発をきたした症例を経験した。

本症例は臨床的及組織学的にこれ迄報告されている、いわゆる軟部好酸球性肉芽腫と全く同様な所見が得られた。尚本例は再発例で、かつ多発性であった為摘出術に加え、放射線療法及ステロイドホルモン投与の 3 者併用療法を行え、3 年後の今日再発をみとめていない。

4. 乳児臍胸の 1 手術例

岐大第 1 外科

鬼束惇義、佐野 彰
馬場英逸、広瀬光男

5. 最近 2 年間における臍胸治療成績について

国立療養所岐阜病院外科

中納誠也、小林君美、井上待子
加藤康夫、山里有男、石原 浩

最近 2 年間における臍胸の治療成績を検討し、我々の臍胸に対する外科治療方針について述べた。

内科的療法でも治癒するものもあるが、過半数は直達療法の適応となる。

術式選択については、以下の如くである。

- (1) 罹病期間が短く、肺内病巣は小さく、肺の再膨張が期待出来るものについては肺剥皮を行う。
- (2) 肺病巣が、1 肺葉、或いは偏側肺に局限していれば、肺機能、全身状態が許せば、葉切、或いは全肺を

行う。

(3) 難治性の例には開放療法を行い、二次的に創を閉鎖する。

(4) 胸成術を施行せざるを得ない例もあるが多量の肋骨切除は極力さけるべきである。

6. 心膜嚢腫の 5 例

国立療養所岐阜病院外科

山里有男、小林君美、井上律子
加藤康夫、中納誠也、石原 浩

昭和 39 年より昭和 49 年の 10 年間に縦隔腫瘍の中でも比較的稀とされている心膜嚢腫の 5 例を経験した。症例は男 1 例、女 4 例で年齢は 3 才より 59 才である。2 例は右心横膈膜角に、他の 2 例は右上縦隔に、他の 1 例は後縦隔に存在している。文献的に考察を加えて報告する。

7. 手術的に治癒せしめた褐色細胞腫の 1 例

岐大泌尿器科

伊藤文雄、堀江正宣
河田幸道、西浦常雄

患者は 26 才の主婦

定型的な褐色細胞腫の症状とその検査成績の裏付けにより確定診断のついた左副腎性褐色細胞腫の 1 例で、術前処置を何ら行わず、術中、術後の輸液と輸血で血圧の管理を行い、治癒せしめた。本症例の特徴は、plain film で異常所見を認めず、PRP で Contrast の強い Tumor 影をみたこと、選択的左副腎静脈撮影で、左副腎静脈を確認し、手術に際し、迷わず迅速に静脈結紮が行なえたことである。摘出腫瘍は 150g、ほぼ球形で、組織学的に証明された。術後検査成績が完全に消失したことから、異所性の腫瘍の合併は現在のところないと思われる。

8. 褐色細胞腫の麻酔管理

岐大麻酔科

佐伯英行、伊藤雅治、山本道雄

9. 術前窒息死を来した巨大な Cystic hygroma の 1 例

岐大第 2 外科

今村 健、山本真史
榎木良友、坂田一記

10. Cystic hygroma の1例

岐大第1外科

松原長樹, 村勝知
雑賀俊夫, 村瀬恭一

Hygroma とは一般に嚢腫, 粘液嚢腫の意味であるが, Cytic Hygroma は一層の内皮細胞で被われたリンパ性起源の嚢腫に限定して用いられる。

我々は最近新生女児にみられた Cystic Hygroma を経験したので報告する。

症例は新生女児で, 某院産科にて満期安産にて生まれた。出産直後より, 右側頸部と右腋窩, 上腕・胸部にまたがる腫瘤を認めたので, 即日当科へ紹介され入院した。

諸検査の結果, 右側頸部と右腋窩の Cystic Hygroma と診断し, 成長をまって手術する事にしたが, 生後8日目になって, 腫瘤が暗赤色となり, 貧血を認めたので, 生後16日と23日目に腫瘤剔出術を2回に分けて施行した。

本症は胎生期のリンパ嚢の遺残物より発生するといわれており, 頸部に多発するが, 時に縦隔へ浸潤し死の転帰をとる事があると言われているが, 大部分は予後良好である。

11. Villous Tumorの1例

岐大第1外科

安藤喜公, 伊東達次
清水幸雄, 後藤明彦

第77回 岐阜外科集談会

日時: 昭和50年2月18日午後5時30分

場所: 岐阜大学病院新外来棟4階講堂

1. 教室における直腸脱について

岐大第1外科

伊東達次, 佐野 彰
雑賀俊夫, 後藤明彦

我々の教室及び関連病院において, 直腸脱10例を経験した。ここに云う直腸脱は直腸壁全層の反転脱出する完全直腸脱である。性別は男5例, 女5例。年齢は21才から最高78才で, 男の平均年齢は40.1才, 女は

12. 巨大な小児後腹膜奇形腫の1治験例

岐大 第2外科

日野輝夫, 大熊晟夫, 国枝篤郎
県立岐阜病院小児科
黒田 勲, 及川 肇, 竹友隆雄

生後9カ月の女児で, 左側腹部腫瘤を主訴として来院。腫瘤は成人拳大で表面平滑, 境界鮮明, 緊満弾性であり, 排泄性腎盂撮影, 大動脈造影などの検査後, 手術にて摘出した。腫瘤は多房性嚢腫で組織学的には良性形腫であった。

〔考察〕 小児の外科的腹部腫瘤の80%は後腹膜腔内に発生し, 固形腫瘍としては, ウイルムス腫瘍, 神経芽細胞腫が圧倒的に多いが, 1才未満の乳幼児に関しては, 奇形腫の頻度も高く, 3者の間に差はない。又奇形腫は小児腫瘍の約9%を示しており, 年齢と発生部位の関係, 性差, 悪性の頻度に特徴が認められ, 当教室小児奇形腫例にても, この奇形腫の特異性を示している。後腹膜奇形腫は腹部腫瘤を主症状としており, 検査法として排泄性腎盂撮影, 大動脈造影, 超音波診断等は重要であり, 臨床的成績と自験例とを比較し報告した。治療としては可及的早期に摘出し十分な経過観察が必要と考える。

60才である。病歴期間は1~10年と長年にわたるものが多い。既患歴では, すでに直腸脱の手術をうけたものが3例ある。症状は肛門出血, 排便痛, 排便障害があり, 特に高度の症例では脱出時に排尿障害を伴うものが1例ある。直腸脱出の長さは5~6cm4例, 6~7cm2例, 10cm1例, 20cm1例である。手術方法は Thiersch 銀環法6例, 経腹の手術4例で, うちわけはタグラス嚢処理手術+S状結腸固定術1例, タグラス嚢処理手術+会陰側骨盤底補強術1例, Kümmel